

技術士

起業して家族との時間を守る

下請けに徹してやりたい仕事に専念

「技術士という資格を持っていたからこそ、独立に踏み切れた。資格がなければ会社の辞令に従って東京に転勤していただろう」と言うのは、有澤良一さん。建設コンサルタント会社に約20年勤めた後、アリサワ技術(富山県高岡市)を設立した。社員は5人で、土木構造物の設計や施工管理のほか、技術士の資格取得のための講習会や、ISO認証支援コンサルティングなども手掛ける。

独立したのは96年。3年間の単身での東京勤務を終え、家族のいる富山に帰って間もなく、再び東京勤務を命じられたことがきっかけだ。

当時、有澤さんには転勤に応じられない理由があった。「そのころ、中学生だった長女が学校を休みがちになり、次女も休み始めるようになった。このまま東京に転勤してよいものか、妻に相談した」。妻の答えは、「子どもが不登校になっては

困るので、富山にいてほしい。どうしても転勤するなら家族全員で東京に引っ越ししましょう」というものだった。

自分の人生はせいぜい20～30年だが、子どもたちはこれから50年、60年と生きていく。それなら子どもの人生を大切にしたい方がいい——。そう考えた有澤さんは、会社に辞意を伝えた。「技術士の資格を持っていたので、独立しても会社を



有澤 良一さん

アリサワ技術社長

47年生まれ。72年に明治大学工学部機械工学科を卒業後、川田工業に入社し、粗大ゴミ処理プラントの研究開発を担当。76年に大日本コンサルタントに転籍し、JR関連施設の設計・管理や河川・砂防関連の調査・設計などを担当する。96年にアリサワ技術を設立。81年に技術士(建設部門一施工計画、施工設備および積算)を、88年に技術士(建設部門一河川、砂防および海岸)を取得

(写真:大井 智子)

やっていく自信はあった。その後、子どもたちは元気に育ち、孫も生まれた。当時の選択は正解だった」と、有澤さんは振り返る。

合格後に技術士の重みを実感

建設部門の技術士(施工計画、施工設備および積算)の資格を取得したのは81年で、88年には同じく建設部門の河川、砂防および海岸も取得した。30代のころの有澤さんには、「土木関係の資格をすべて取得しよう」という大きな目標があった。

76年に、入社4年目の建設会社から建設コンサルタント会社への転籍を命じられた。専門分野の違う自分が同期の仲間に負けないためには、土木関係の資格をすべて取得して対抗するしかないと考えたのだ。

技術士の重みを実感したのは、合格してからだ。発注者だった当時の建設省の出先の課長に技術士と刷られた名刺を渡すと、「きみ、本当に受かったの?」と冷やかされ、「技術士ならこれぐらいできるだろう」とはっぱをかけられた。技術士になったことへのプレッシャーを感じ、以降、専門誌を読むなどして一生懸命勉強するようになったという。

一級土木施工管理技士、地すべり防止工事士、二級建築士、一級造園施工管理技士など、06年までに取得した12の資格は、すべて一度で合格した。パワーの源となったのが、高校受験に失敗した苦い経験だ。「失敗したときのダメージに比べれば、受験の苦労など何分の一ではない。失敗は成功の元などと言

お勧めの勉強法

分厚い報告書の概要版をまとめる

子どもがいるので家では勉強せず、朝の通勤電車で過ごす45分間を有効利用した。知人に会わないように電車の端の車両に乗り、短期集中型で勉強した。ほかにもOJT(職場内訓練)として、例えば、1000ページほどの仕事の報告書を作るとき、同時に5ページほどの概要版をまとめ、発注者に納品するほか社内の勉強会に使った。こうした試みは、技術士の経験論文を書くのに役立った。

前職の建設コンサルタント会社で

は、新しい業務や人のいやがる業務を積極的に担当し、問題点はメモ帳に記録していった。日常業務がすべての勉強につながると考えて、真剣に取り組んだ。

当社では、技術士の資格を取得するための講習会を07年から実施している。講習会で使っているテキスト「技術士受験の手引き」(左ページの写真を参照)は、約30年前に自ら原案を作成し、何度か修正を重ねてきたものだ。(談)

うが、自分は『失敗は絶対に許されない』という信念で、何でも一回で受かるつもりで臨んできた」。

社会的な信用を得られる

技術士を持っていて良かったことを尋ねると、「独立できた」、「社会的信用が得られた」に加え、「企業内技術士から独立技術士となったことで、幅広い知り合いが生まれて異業種交流ができた」との答えが返ってきた。

ベンチャー企業として当時の通商産業省などの支援を受け、独立以降の9年間は富山県産業創造センター内に事務所を構えた。ここで知り合った起業家たちとの異業種交流は、現在も続いている。

約20年間、富山県技術士会と北陸技術士懇談会に所属し、技術士の認知度向上の活動などを続けてきた。09年10月には、事務所の2階に、技術士などの資格を持つ中高年

技術者の就職をあっせんする会社も立ち上げた。

有澤さんは、「独立してから仕事はたくさんあったが、単純な道路設計業務などがほとんど。もっと難易度が高く、調査・計画といった“川上”の仕事をやりたいと考えた」。05年に建設コンサルタント登録を抹消して下請け業務に専念することに。これが口コミで広がり、本来やりたかった設計照査や施工管理の仕事が舞い込むようになったという。

現在の年間売り上げは約300万円だが、今の規模を大きくする気はない。「私にとっては、数ある資格のなかで、技術士が一番役に立ち、プラスになった。技術士を持つことで社会的信用を得られ、この13年間、順調に会社を運営することができた。現在は、富山、福井、新潟などからも仕事の依頼があり、少人数の会社でいい仕事ができている」と満足している。